○月×日、今日は快晴

小声早田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
○月×日、今日は快晴

【Ｎコード】
Ｎ２０３１Ｙ

【作者名】
小声早田

【あらすじ】
半年前に発売されたＭＭＯ、リクドー・オンライン。キャラクターを作成し、さあ初ログイン！……で気がつけば、ゲームの中だった。レベルは１、装備は趣味の悪いパンツ１枚。そのうえヒロインの座は佐藤さんにとられそう！？

プロローグ　麗しのシュウコちゃん

「ねーちゃん、これやる？　……一応聞くけど、なにやってんの？」

ノックの音と同時に戸を開けた弟の修也が、顔の横で薄く四角いパッケージをひらひらと振って見せたとき、私はベッドの上で、筒状に丸めた布団の上に馬乗りになり、そのてっぺんに置いた枕に拳を叩き込んでいるところだった。

「返事を待ってから開けなさいよ。ノックの意味がないでしょうが」

問いには答えず、私はベッドから降りて、修也の元へ向かう。

「自分はノックもせずにあけるだろ」

失礼な。こう見えても思春期の弟を持つ姉として、弁えるべきところは弁えている。身繕いがいるだろうと思われる時には、わざと騒々しい足音を立ててから侵入しているのだ。

「それで、これ、なに？」

修也の指に挟まれているものを、顎で指し示すと、「ああ、そうそう」と弟はにんまりと笑顔を浮かべた。

「リクドー・オンライン。略してＲＯ聞いたことぐらいあるだろ？」

名前に覚えはなかったが、おどろおどろしい怪物が赤い目を光らせている絵を見て思い出した。確か半年ほど前に盛んにＣＭが流れ

ていたはずだ。

「オンラインゲーム？」

「そうそう、一回やってみたいって言ってたろ」

そうだっけ？　と私は首を捻った。

もしかしたら言ったかもしれないが、ＣＭを見ていて何とはなしに言ってみた程度だったのだろう。さっぱり記憶にない。

「でもなー。お金いるんじゃないの？」

弟がいるせいか、同性の友人に比べれば色々とやってきたほうだとは思うが、最近はどうにも興味もわかず、ゲームにお金をつぎ込みたいとはさっぱり思わない。

「それがさ、三か月分払っちゃってんだよね。４５００円」

なに！？　中学２年の弟に４５００円は決して安い金額ではない。それを私に譲る気になったということは……。

「いくらで買ってほしいの？」

じと目で見ると、修也はニカッと白い歯を見せた。

「今なら三割引の３０００円でお譲りいたします！　ソフト込みでこの価格は今だけ！」

「高い。２０００円」

きっぱりと言い捨てると、修也は大げさに肩を落とした。

「んな、殺生な。ソフト代も入れたら一万近くになるんだぜ？　頼むよ姉ちゃん」

情けない声で拝む修也に、私は「仕方がないなぁ」と呟いた。

修也が何故、大安売りしてまでお金がいるのか、その理由は分かっている。

この夏、修也には人生で初の彼女が出来たのだ。彼女と出かけるためにお金が要り、彼女との時間を捻出するために、ゲームをする時間がなくなったのだろう。

いつの間にか、私より高くなった、修也の目を見て私は微笑んだ。

「２１００円」

慈愛に満ちた笑顔を浮かべた私を見て、ぱあっと顔を輝かせた修也は、その言葉にがっくりと肩を下げた。さっきよりも、位置が下がっている。

「私だってね。そんなに余力はないよ。携帯代も馬鹿にならないし」

４月に晴れて高校生になりバイトを始めたとはいえ、両親と学校の許可がおりた、週２回３時間の近所のパン屋では給料もたかが知れている。念願だった携帯の通話料を払えば手元に残るお金はそう多くない。

というのは建前で、本音はこうだ。

馬鹿やろう！　中坊が彼女をつくるなんて１０年早いわ！　年齢＝彼氏いない歴の私に謝れ！

浮かれて、やれプリクラだ、プールだと騒ぐ弟の幸せを、一分の曇りもなく祝えるほど、老成しちゃいない。

清く正しく慎ましやかに交換日記でもしてろっての。

「２８００円。絶対おもろいから！　ジョブチェンジも結構自由だし、姉ちゃん、そういうの好きだろ？」

しかし弟もめげなかった。

結局、私と弟の攻防は３０分に及び、２５００円で決着を見ることになる。以前なら、２２５０円までは持っていけたのに……幸せパワーは偉大だ。

「えーと、なになに。ここは剣と魔法が支配する大陸オールンド」

風呂上りの濡れた髪を、肩にかけたタオルでぎゅっとしぼる。説明書を片手に床に座り込みベッドに背を預けて私はブツブツと呟いていた。

「貴方は英雄になることを夢見て、様々な種族が集う街ロップヤーンにやって来た駆け出しの冒険者……めんどい」

分厚い説明書をぽいと投げ捨てて、モニタへと向き直る。

適当にやればなんとか出来るだろう、とコントローラーのボタンを押した。

画面に現れたのは、可愛らしいフリフリの服に身を包んだポニーテールの女の子。手には彼女の腕の力では到底振り回すことなど適わないであろう、巨大な剣が握られている。

くるくると回る彼女の足元に表示された文字を見て、私は眉を寄せた。

レベル６９　名前Ｓｙｕ－ｋｏ

修也の意外な性癖を見た気がした。……この夏に出来たのはま

さか彼氏じゃないだろうな？
首を傾げて笑顔を浮かべるシュウコちゃんを横目に、私は迷わずＮｅｗ　Ｇａｍｅのボタンを押した。
ピロリンという軽い音と同時に、一瞬、カーテンの色が明るくなった。
あまりのタイミングの良さにびくっと肩が震えた。そのままの姿勢で固まっていると、数秒遅れて轟音が響く。雷か。一雨来るかもしれないなあ。結構近かったけど大丈夫かな？　でも、まあ、落ちるとしたら、はす向かいの斉藤さんちの斜め裏にある空き地にある木に落ちるだろう。
気を取り直して、お次は名前だ。
……
名前なあ。
オフなら「ＡＡＡ」でいいけど、オンラインじゃ被りそうだ。でも考えるのも面倒くさい。Ｓｙｕ－ｙａってつけたら怒るかな。どうしようかなーっと、クキクキと首を捻った時、ふと、机の上にある卓上カレンダーが目に入った。
１０月。
よし、それにしよう。「Ｏ」「Ｃ」「Ｔ」「Ｏ」と。
種族、性別、顔、髪型、髪色、肌色、など等、さくさくと設定していく。
名前はＯＣＴＯ、種族は人間、性別は男、顔は初期設定のまま、髪は短髪、髪色は茶、肌色も初期設定。
うーわー。地味な仕上がり。
ボクサーパンツ一丁で仁王立ちしている、我が分身オクトの出来に苦笑しつつ私は決定ボタンを押した。
長くても３ヶ月の付き合いなのだ。そこそこ見られれば何でもよかった。
ウィィンと軽い駆動音。
画面が暗転し、次の絵がうつるはずだったその時、耳の側で大量

の皿を叩き割るような、とんでもない音がしたかと思うと、視界が白で埋め尽くされた。
真っ白だった。暗闇の中でふいに懐中電灯で顔を照らされたように、光以外何も見えなくなる。
目を瞑ろうとして、既に瞑っている事に気づいた。瞼を貫いて、容赦なく襲う光。目の奥で光の渦が濁流のように巻いている。眩しいじゃなくて、気持ち悪い。両手を重ねて顔を覆う。それでもまだ足りない。体が傾ぐ。力が入らない。足が震える。呼吸が出来ない。気持ち悪い。
光に解けていくように感覚が消えていく。藁にもすがる気持ちで伸ばした腕がつるりとしたものに触れた時、とうとう私の意識は途切れた。

どうも

ぶえっくしょい

くしゃみが出た。弾みで動いた体の下で、じゃりっと音がする。

頭が重い。こめかみに手を当てると、その掌で目を押さえた。

また、あの光が襲ってきそうな気がして怖かった。ぎゅっと目を押さえて、光がどこにもないことを確認すると、少しずつ力を抜いていく。手をかざしたままそっと、目をあけた。

真っ暗だった。さっきは眩しくてたまらなかったのに、今度は何も見えない。

停電……したのかな？

雷はどこにおちたんだろう？　まさか家ってことはないよね？

一瞬、自分に落ちたのではないかと思ったが。別段体に痛みはないし、焦げた臭いもしない。むしろかびっぽい臭いがした。

何かおかしい。

何でこんなに暗いのだろう。停電にしても何も見えないこんな暗闇になるだろうか。

それに、静か過ぎる。停電なんてしたら、すぐに家族が騒ぐはずだ。懐中電灯を探して、家の中を見回ったりするだろう。

背に当たる硬い感触はなに？

カビの臭いはどこから……。

「……っ！？」

軽くパニックに陥りかけた時だった。

私は目を見開いてそこを凝視した。

遥か遠くにぽっと明かりが灯ったのだ。赤にも橙にも見えるそれは、形を変えながら、どんどんと大きくなっていく。

「なに……？」

喉から自分のものとは到底思えない低い声が出る。

その声にも驚いたが、今はそんなものに驚いている場合じゃない。

ものすごいスピードで迫る明かりは、場所を移動するたびに、辺りを照らしてゆき、信じられない光景を私に見せていた。

ごつごつとした灰色の岩肌。ばらばらの間隔で立てられている柱。所々に生えた苔。

そして

角の生えたばかでかい獣。

食べられるかもしれないという恐怖がわかなかったのは、その獣の口にはくつわがかませられており、長い鬣の間から、獣にまたがる人の姿が見て取れたからだ。

……多分、人。

推定、人。

希望、人。

いや、やっぱ、違うかな……。

鈍色の毛の向こうにちらちらと見える、その人型のものは、全身を固そうな鎧に包まれていた。

唯一、鎧を纏っていない頭部に、にょっきりと生えた、捩れた二本の角さえなければ私はその人型の何かを、人間だと認識できただろう。

タタンッ、タタンッ。と巨体に似合わぬ軽快な足音で近づいたそれは、私のすぐ側で急停止した。

獣上の人型の角のある何かがぐぐいっと手綱を絞ったのだ。

鞍に括りつけられたランタンがきらきらと光を放ち、辺りを照らしている。

身動きもせず、声も上げず、人型の何かが、獣から降りるのを凝視していた。

長い手足に驚くほど体にフィットした細身の鎧（脱ぎ着はどうや

ってするのだろう？）。髪と目は暗い赤色で、角は濃淡のあるクリーム色。
切れ長の目の縁には何やら不可思議な模様の刺青が入っていた。
呆然と己を見詰める私を、人型の角のある何かも、じっと見詰める。

「……」
「……」

言葉もなくただただ見詰める。

「……」
「……」

いや、もういいじゃん。
無言のお見合いに早々に痺れを切らした私は、手をあげてひょこりと会釈をした。

「ども」
「……どうも」

うおおおおおお。言葉が通じた！？
人型の角のある何かは、日本語を解する人型の角のある何かだった！
通じた、嬉しい！　と喜んだその瞬間
――――――怒涛の混乱に襲われた。
荒れ狂う、焦りと苛立ちと恐怖に体中を掻き毟りたいような訳の分からない衝動に駆られる。

じっとしていると気が狂ってしまいそうで、私は跳ね起きると、不思議そうに首を傾げている人型の角のある何かに詰め寄った。

「何なの。何なの。あんた何なの！？　ここどこ！　私どうなるの？　言っとくけど、顔は十人並みだし、寸胴だし、貧乳だし、あ、足には自信あるけどって何言ってんだ私。ウソウソ足も駄目だから、偏平足だし、脛毛濃いから処理を怠ると大変なことになるし、それにお尻にはまだ蒙古斑が残ってるの！　それからそれから、家は別に金持ちじゃないし、身代金なんか出ないよ。一番上だけ本物であとは新聞紙の紙束持ってこられるのが関の山だから！　あ！　あとは、えーと、食べても美味しくなんかないからね！　これだけは絶対！　だって肉大好きだし、ほらっ、肉食の獣は食べても美味しくないって言うじゃない？　それに添加物とりまくってるし、食べたらお腹壊す事請合いよ。食べるな危険！　超危険！　んでから、えーとっ、えーとっ。そうそう！　頭も良くないよ！　一見よさそうに見えるらしいけどね。全然違うから。見掛け倒しだから！　記憶力パーだし、理解力は雀の涙を通り越してミジンコの涙だし、応用力０だし！　だから浚って脅して悪の研究させようったって無駄もいいとこだから。こういうの何ていうんだっけ？　あ、あれあれ。骨折り損のくたびれもうけ。分かる？　意味ないから、無理だから、徒労だから、水泡に帰すから！　でもって、あなた男だよね？　いや、雄って言ったほうが正しいのかな？　あー、もうわかんない。わかんないけど、嫁にこいってのもないからね。うん、ないないない。本当にありえない。料理できないし、子供苦手だし、裁縫なんてやらせたら、布と指縫い合わせて血まみれになるからね！　アイロンかけたらかける前より皺増えるって評判の腕前だから。片付けは……わりと好きだけど、必要なものまで捨てちゃって後で『あ～～～～～』ってなる事何度もあったから。大事なもの捨てられたくないでしょ？　だったらやめといた方がいい！　絶対いいよ！　ああ、そうだ！　大事！　大事な事忘れてた！　私、生理不順だか

ら！　そうすると、ほら、排卵期もいつかはっきりわかんないし。オギノ式なんてもってのほかだし、　安産体型とは程遠いし、多産の家系でもないし、生理痛きついし、だから、貴方の子供も絶対産めないと思う。種族違うしね。そんな角のある赤ん坊が通れる頑丈な産道はないから！　だから、産めよ増やせよには向かないの！　さらにさらに、私すっごい性格悪いのよ。自分で言うのもなんだけど、根暗。まじ根暗。一に根暗、二に根暗、三、四も根暗で五も根暗。貴方もその外見とダサイ……いえいえ、個性的なファッションセンスのせいで孤立して寂しいかもしれないけど、話し相手には到底適さないから。謙虚さを出したくて言ってるんじゃないからね。今日だってむかつく男の顔を思い浮かべて枕をサンドバックにしてたんだから。クラスメイトなんだけど、毎日毎日からんできてほんと、うざい。あー、もう思い出すだけでうざい。別に一人寂しく本を読んでようが私の勝手でしょ？　彼氏いそうになくてなんなのよ。そうよ。いないわよ。それであんたに迷惑かけたかってのよ。友達も少ないわよ。どうせ暗いわよ。だからって懐中電灯で照らす馬鹿がいるかってのよ。お前小学生かよ。つか、その懐中電灯どっから持ってきたのよ。まさか私に嫌がらせするためだけに、わざわざ家から持ってきたの。ばっかじゃないの　ほんと馬鹿。救いようのない馬鹿。……って、あれ？　微妙に話がそれたけど、とにかくあのチャラ男を思い出すだけで一晩中、枕殴れるほど根暗で執念深いの！　ほら、話相手にも異種族間交流の相手にも向かないでしょう！？　んで結局、あんたは誰で、ここはどこ！？」

思うままに喚きたてて、喉が痛み始めた頃、ようやく私はほんの少しだけ冷静さを取り戻した。

口を閉じれば、静かになった空間にピチョンと水滴の音が木霊する。

息切れして肩を上下させている私を、じーっと冷めた目で見ていた人型の角のある何かは、ふうとため息をついて、面倒そうに口を

開いた。

「ここは久遠の洞窟で、俺は見てのとおりＫＡＩ。付け加えると、こんなナリなのは、ヤクシャを選択したからで、話し相手も、嫁も、求めてないし、金を要求するつもりも、あんたを食う気もない」

「……え？」

何か色々と突っ込みどころのある言葉を聞いた気がする。

「あんた、今来たばかり？　どうしてそんな格好をしている。装備は？」

人型の……ああくそ、めんどくせえ。以下略でいいわ。は、人にはあらざる色の瞳を辺りにさまよわせた。

「来たって、どこに？」

首を傾げれば、人型の以下略は煩わしそうに腕を組んだ。

「ここにだよ」

「ここってどこ？」

人型の以下略のこめかみがぴくっとひくつく。

「あんた、人の話を聞いてなかったの？　それとも馬鹿なのか？ここは久遠の洞窟だよ。くおんのどうくつ。分かった？」

私は頷いた。

「久遠の洞窟ね。それは分かった。で、その久遠の洞窟ってどこにあるの？」

人型の以下略は右手で顔を覆って大げさにため息をつく。

「ここは、リクドー・オンラインの中。久遠の洞窟は二週間前に発売された拡張パッチに入ってたダンジョンだ」

人型の以下略は、日本語を解する頭の残念な人型の以下略だった。

「あんた、俺は頭がおかしいと思ってるだろ。俺も最初はそう思ったよ。つーか、あんたに会うまで思ってた
」

今現在もおかしいんじゃ……。

人型の以下略は、ため息をついて、乗ってきた鈍色の獣を振り返る。

獣はトラにライオンのたてがみを植毛して、カラーリングして、角をつけて、大きさを3倍にしたような姿をしている。

長いたてがみを指で梳きながら、人型の以下略は獣に寄りかかるようにうつむいた。

「あんた、さっきの話からすると、本当は女だろ？　自分の体が今どうなってるか見てみたら」

「どうって……」

私は顎をひいて、自分の体を見下ろした。

そして、

「な、な、なんじゃこりゃあああああ」

絶叫した。

ない！

「なんで裸！？」
「いや、そこじゃない」

驚愕の叫びに、冷静な突込みが入る。

「あ、パンツはいてた。よかった……って……え？」

私は大きな掌で裸の胸をまさぐった。

「ない」

ぺたぺたぺたといくら手を這わせてもあるべきはずのものがない。

「私の！……私の！……私の貧乳がないっ！」
「……もう少し別の言い方はないのか」

私は大口をあけて固まった。
ささやかながら、確かにあった胸のふくらみは消え、むきむき胸筋と六つにわれた腹筋が、視界いっぱいに広がっている。

「なに、これ」

呆然とする私に、人型の以下略が心底面倒くさそうに、だがどこか気の毒そうに声をかけた。

「あんた、ヒューマンの男を選択しただろ。髪も目も顔も、あんたが選択したとおりになってるはずだよ」

「せん……たく？」

固まる首をぎこちなくまわして人型の以下略を見る。

「私、染みとりは得意じゃな」

「そっちじゃない」

私の言葉が終わるのを待たずに、人型の以下略のつっこみが炸裂する。

「せん、たく……」

そういえば、と私は腰を覆っているパンツに目を向ける。

この黄色と赤と緑の斑模様は柄はどこかで見た覚えがある。つい、さっき――――時間の経過がわからないから、多分、ついさっき、私が作ったプレイヤーＯＣＴＯ（オクト）がはいていたパンツだ。

ばっと手をひろげてみれば、見知った私のそれより、ふた周りは大きな手が、逞しい腕の先についていた。

「オクトだ」

「それが、あんたのプレイヤーキャラクラーの名前か」

「うん、そう」

「これで分かっただろう。俺達は、リクドー・オンラインの中にいるんだよ。作成したキャラクターの姿でね」

信じられない。到底信じられない。どうしても信じられない。

すっかり変わってしまった自分の体をみても、やっぱり、まだ信じられない。

けれど……信じなくてはいけないのだろう。これが現実でないのなら、私の頭がどうにかしてしまったということになる。狂って

しまったと思うより、人型の以下略の言葉を信じる方がまだマシじゃないか。それがどんなに奇々怪々なことだとしても。

これは、夢か？
――――ちがう現実だ
これは、バーチャルか？
――――ちがうリアルだ
これは、キャラクターか？
――――ちがう私だ

私は　今　ＯＣＴＯとして　リクドー・オンラインのなかに　――――いる

「って信じられるかっ！　何かっこつけてんだ、私は！　ぎゃー。なにこれ。もうやだ。やだやだやだ。夢なら覚めて！　や、でも、覚める前にこのパンツの中は見てみたいかも……」

そろりと伸ばした手を、はしっと横から伸びた手が鷲掴みにした。長い爪は珊瑚色でつやつやと光っている。ネイルいらずだ。

「あんたなあ……」

がっくりとうな垂れる人型の以下略は、はたから見ても気の毒に思うほどに疲れた顔で盛大にため息をついた。

「気持ちはわかる。だが、俺達はこうして姿を変えてここにいるんだ。いい加減落ち着いてよ」

人型の以下略さんの前だった。自重、自重。
私はぱっとパンツにひっかけた指を放すと、ちらりと人型の以下

略を見た。
オクトである私よりも、頭一つ分は背が高い。
「あの、人型の以下略さんも、ＲＯをプレイしていたんですか？」
「そう」
長い小豆色の髪の毛を掻き揚げて、人型の以下略は首肯する。それから首をかしげた。
「……その人型の以下略というのは俺のこと？」
え、そう思ったから頷いたんじゃないの？
「俺の名は見てのとおりＫＡＩだと言っただろう」
また、人型の以下略は引っかかる事を言う。
薄い唇の中には、良く見れば牙が伸びていた。
「えーと、人型の以下略改め、カイさんですね。あの、取り乱してすみません……私の夢にしてはよく出来てるな」
前半はカイに向かって、後半は俯いてぼそぼそとこぼした私に、カイはもう、何度目か分からないため息をついた。
「夢じゃないと言ってるだろう。いい加減あきらめて認めてよ」
とりたてて頭は良くないけれど馬鹿じゃない。
私だって段々と分かってきている。肌をとりまく空気の冷たさも、獣の生暖かい呼気も、耳をうつ水音も、硬く変わってしまった体も、どれも夢にしてはあまりにも生々しい。

けれど、目覚めて数分で認められるほどぶっとんだ思考も持ってはいないんだもの。もう少し動転させてくれてもいいじゃないか。

「ところで、あんた、装備は？」

「はい？　装備？」

唐突にかけられた問いに、私は思わず自分の体を眺めまわした。

――――――うほっ　いい体だ

「防具や武器だよ。なんで裸なんだ。縛りプレイでもしてたの？」

ピシャーン

と、青い稲妻がカイの背後に落ちた気がした。

『縛りプレイ』

なんて卑猥な。何なのこの人、そういう趣味なの？

カイを見る目が明らかにおかしくなったのが分かったのだろう、彼はぽっと頬を染めて激しくうろたえた。

「ちっ、ちがう！　そういう意味じゃない！　あの、普通のやり方にあきた奴らが、その、よりプレイを楽しむために、えーと」

さっきまでの冷静さはどこへやら、しどろもどろに言い募るカイに私は冷ややかな眼差しを向ける。

「普通のやり方も未経験なんで、ちょっとそういう上級者向けのプレイのお話は理解できかねます」

「違うと言ってるだろ！　あんたっ！　人の話は最後まで聞けよっ！」

ぎゃんぎゃんとわめくカイに、縛りプレイのなんたるかを説明し

てもらうのに、かなりの時間を要した。
本当はすぐに気付いたんだけどね。つい。

「縛りプレイなんかじゃないですよ。始めたばかりだったんです」
「……プレイ開始は街からだっただろう。倉庫にあった皮の服と、ショートソードはどうした？」

ダメージの抜けない憔悴した様子で、それでもカイは冷静に話を進めようと努めていた。実に涙ぐましい。

「いや、キャラクターこしらえて、ログインしようとしたら、雷が落ちてピカッて光って、気付いたらここにいたんですけど」
「まじか……なら、当然レベルは」
「1です」

二人の間に、しんと、沈黙がおりる。

「ここは、二週間前に発売された拡張パッチに入ってたダンジョンだという話はさっきしたよな？」
「覚えてません」
「したんだよ！」

突っ込み終えたカイは、とうとうその場に座り込んでしまった。

「ここは最低でもジョブレベル６０はないとやっていけない場所だ」

立てた膝に肘をついて、カイは気だるげに顎を乗せる。

「あんた、ここの敵に遭遇したら即死だよ」
「……ですよね」

一気に降りかかったシビアな問題に、私は一言返すと黙り込んだ。
レベル１で、裸族で、難易度高のダンジョンへって、どんだけムリゲー。
元の体よりは余程頑健そうな体は、きっと街の外の小さなしょぼい敵を倒すだけで精一杯なのだろう。
対して、目の前で黄昏れるカイは、頭部を除く全身を堅そうな鎧に包まれている。

「あの、カイさん？」
「ああ」

呼びかけてはみたものの、なんだかこそばゆい。

「あの、キャラクターの名前で呼び合うのもおかしくありません？
本名は？　あ、私、仁木　杏といいます。歳は１６で住所は」
「ストップ」

自己紹介を始めた私を、カイは静かな声で止めた。

「あまり詳しく個人情報を喋らない方がいい」
「え？　なぜ？」
「あんた、オンラインゲームをやったことは？」
「えーと、モンスター狩人を４００時間くらいと、悪魔ゲートは２０時間で詰まって、ＧＧは２時間で投げました」

指折り数えながら、今までのゲーム遍歴を思い出す。最近はあまりやっていないので一昔前のゲームばかりだ。

「なら分かるだろ。ゲーム内で発言するとどうなるか」

「え？」

ゲームで発言すると……文字が現れる。そして、その文字は、

「他のプレイヤーから丸見え」

カイは頷いた。

「そうだ。この世界や、他のプレイヤーが今どんな状況にあるのか、俺達には分からない。ゲームに取り込まれたのは俺達二人だけなのか、それとも他にもいるのか。今いるこの世界とゲームの世界はリンクしているのか。今も普通にゲームを続けているプレイヤーがいるのか。そいつらから俺達は認識されているのか。何も分からないんだ。なら、あらゆる事態を考慮して行動すべきだろ」

や、ややこしい。けど、確かに言うとおりだ。それに、今も普通にゲームをプレイしているプレイヤーがいて、私たちの事が認識できているとしたら、

したら……

「私、さっき、めちゃくちゃ言わなくても言いことを喋りまくったじゃな～～～～～～～い」

私は頭を抱えてうずくまった。

動揺して、かなり恥部をさらけ出した気がする。

「その、気にするな。　ゲーム設定だと、同じダンジョン内の一定距離にいるやつにしか届かないはずだから。まだここまで来てる奴は少ないと……思うよ？」

ぽんぽんと肩を叩くカイの手が暖かい。頭を抱え込んでいた腕で、ぱっとカイの手をとると、強く握り締めた。

「本当に？　本当にそう思う？　私思いっきり本名まで……、いやいや今のは本名じゃないです。本名は山田京子ですから。聞いてますか？　どっかのプレイヤーさん。本名は山田京子ですから！つか、カイさん、思いっきり疑問形じゃないですかあ！」

もう駄目。立ち直れない。

カイの手を握り締めたまま、私は地面にのめりこみそうな勢いで落ち込んだ。

ぴちょん、ぴちょん、と響く水音がさらに心を沈めてくれる。

「落ち込んでるところを悪いけど、ここから出ようと思うんだけど……」

「異存はないです」

私に握り締められた手を、そっとふりふりして、取り戻そうするカイ。

その手放すまいと、ぐぐっと力を込めて胸元にひっぱりこんだ。

「おいっ、何するんだ」

よろけた、カイの赤い目がすぐ間近に迫った。

「私も連れてってくれますよね？　私、ここの敵にあうと即死ですから！」

必死の形相で迫る私からカイはぷいっと目線をそらした。

「見捨てていけるほど人でなしじゃない」

よっ、男前！

「よろしくお願いします。本当にお願いします！　本当もうマジで！　なるべく迷惑かけないように、逃げ回りますから！」
「いいよ。あんたは、出来る限り虎徹の背中に乗っとけよ」
「刀に？……それはちょっと股が」
「あの騎獣の名前だよ！　虎徹！」

カイは青筋を立てて立ち上がると、勢いをつけて、未だに手を握り締めた私を引き起こした。

「ほら、さっさと乗って」

乗って……って言われても。目の前のどでかい虎もどきを見上げて、眉を寄せた。
あの鐙に足を乗せて鞍に跨ればいいんですね。
出来る気がしないんですが……。
立ったまま大人しく待っている虎徹の体につけられた鐙は、私の臍に位置していた。

「カイさん。引っ張りあげるか、お尻を押すか、してもらえますか？」

背後でカイが息を吐く音が聞こえる。
是とも否とも答えず、私の横をすり抜けて、カイは手綱を引き寄せると、鐙に足をかけて地をける。
身軽な身のこなしで獣上の人となったカイは、ぐいっと手を差し出した。

「ほら、手を出して」

精一杯足を上げて鐙にかけ、手を重ねると、ぐっと握りこまれた。
あっと思った次の瞬間には、

「……なんで、そっちの足を鐙にかけた？」

私はカイと向かい合う形で虎徹に跨っていた。
すみません。利き足だったんです……。

ゲヘゲヘ

鞍の上で方向転換をして、私はカイの胸の中におさまった。
背後から伸びた腕が、器用に虎徹の口に噛ませた轡につながる綱を操る。

「カイさん？」
「なに？」
「カイさん、どうしてこんなのを操れるんですか？」
「さあ」
「さあって……」

首を捻ってカイの顔を見る。赤い目はただ静かに暗闇に包まれた前方を見据えていた。

「俺も、あんたと同じ。プレイしていて落雷の音がして、気がついたら、虎徹に乗ってここにいた。虎徹の乗り方も、槍の扱い方も、魔法の使い方も、『カイ』が覚えていることは出来た」

こっちは素っ裸で、洞窟の地面の上に寝転がってたってのに、防具に武器に魔法に乗り物つきか。

「カイさん？」
「……なに」
「予備の装備もってませんか？」
「ない。全部倉庫の中」
「そうですか」
「持ってても、俺の装備じゃひょっとしたら……」

言い淀んだまま、ふいに口を閉ざしたカイは眉根を寄せて、首を捻る。

「したら？」

「……いや、今はいい。それより早くここから出よう。前を見てて。走らせづらい」

はーい。と私は大人しく、カイの言葉に従った。

タタンッタタンッ

虎徹が跳ねるたびに、上下にぶれる視界。

鞍の上にあっても、脚に力を込めて虎徹の体を挟みこまなければ、体が浮いて振り落とされそうだ。　私が、杏のままであったなら、とうに酔って、力尽きていただろう。オクトの体に感謝だ。

「カイさん？」

「……なに」

「カイさん、いくつなんですか？　それぐらいなら聞いてもいいでしょう？　あ、あと、中の人は女性だったりとかしません？」

時折妙にソフトになるカイの口調に、私は希望を込めて尋ねた。どうせなら、同じ境遇の方が心強い。

「……歳は、あんたより下。それから本来の性別も男」

嫌な質問を聞いたというように、答えるカイの声は低い。

「へえ。カイ、年下なんだー。落ち着いてるからてっきり年上かと思った」

「あんた、俺が年下だと分かった瞬間にそれ……」

カイのため息が頭にかかる。

「だって、年上に畏まられると気を使うでしょ。という気遣いなんだけど？　ところでレベルは？　レベルはいくつ？」

「今は魔道騎士の９９」

なんだか色々と諦めたようなカイの声。

「ほおー、それってひょっとしてカンストしてる？　カイってネトゲ廃人なの？」

背後の体がぴくっと反応して固まった後、脱力するように力が抜けるのが分かった。

「あんたなあ。聞いちゃいけない質問ってのがあるだろ」

ははは、ごめんね。いや、心強いよ。と言って脇を通る腕を鎧の上からぽんぽんと叩くと、またため息が頭にかかった。

どのくらい虎徹で駆けただろうか。まだ然程距離を進んでいない気もするが、代わり映えのない洞窟の土壁が続いているからそう思うだけで、実は結構走ったのかもしれない。

「カイ」

「……なに」

どんどんと、投げやりになっていくカイの声。

でも、今はそんな事はどうでもよくて、私の意識は、目の前にどどんと立ちはだかる巨大なアレに集中していた。

「あれは、なに？」

「敵」
「いや、それは分かるけど」
「センジョ・レクス。攻撃を受けると背中のイボから四方に毒液を撒き散らす。得意技は――」
「ジャンプアタック～～～～～！？」
「正解」

でっぷりと太った体からは想像もつかない華麗な動きで、巨大なヒキガエルは洞窟の天井すれすれの位置まで飛び上がる。ゲヘゲヘという下卑た鳴き声が気持ち悪いことこの上ない。
その白い腹の真下には、虎徹とカイと私。

「しっかり掴まって」

言うなり、カイは器用に手綱を操って虎徹を真横へと飛び退かせた。

「ど～～～こ～～～～に～～～～」

絶叫しながら、獣の体をはさむ足にこれでもかというほど力をいれ、鞍の縁に指を食い込ませる。せめて綱を持ちたいけれど、そんな事をしてはカイの邪魔になると分かっているから持てない。
さらに、前方へと一回ジャンプした後、くるりと向きを変える虎徹。

「無理！　無理無理無理！　落ちる～～～～～」
「黙って、舌かむよ」

片手に手綱を持ちかえると、カイは鞍に括りつけてあった、槍に手を伸ばした。

「獄灼炎！」

ぼっと槍の穂先に青い炎がともる。

「伏せてて」

怒鳴ると共に、返答も聞かずに、カイは虎徹をゲヘゲヘに向かって走らせた。

ええええ。逃げようよ～～～～。と主張したいが、喋ると本当に舌を噛みそうだ。

私に出来る事といえば、振り落とされぬように足に力を込めて、指示通りに虎徹の背に腹ばいになるしかなない。「虎徹ごめん」と心のなかで断りをいれて、長い鬣を掴む。

それからの事は伏せてたから見てない。

ザシュッて音がして、ゲヘッて鳴き声がして、また虎徹の体が１８０度回転して、さらにズボッって音がして、ゲヘヘーって断末魔が聞こえて、「アイギス！」と叫ぶカイの声がして、キンって硬質な音が耳を打ったと思えば、ざばざばざばざばっと豪雨が降り注ぐような音がして、しーんと静かになった。

虎徹の荒い呼気にまじって、背後でカイが２～３度深く息を吸い込む音がした。

「もう、顔をあげていい」

あんまり、あげたくない。

「見ておいたほうがいい」

ゲヘゲヘの死体を！？

……車にひかれた小さいカエルの死骸でさえ、あんなにぐろいのに、こんな特大サイズのカエルのなんて。

「はやく、消える」

「消える？」

訳の分からない急かし文句に、私は涙目になりながら、そっと顔を上げた。

でろんと長い下を伸ばして目をむいて息絶えたゲヘゲヘ、その横っ腹にはカイの槍が深々と突き刺さっている。

やっぱりグロイ。

目をそらす事も出来ずに、ゲヘゲヘの亡骸を見詰めていると、つつっと頭上から紫色の液体が滑り落ちてきた。

……滑り落ちてきた。空中の何もないところを、さもそこに何かがあるように、紫の液体が後から後から、流れていく。

「なに、これ？」

「アイギス。毒を被らないように、シールドをはった」

ほほう、それは便利。

カイを中心に虎徹をもすっぽりと覆っているらしい、シールドを滑り、紫の液体は綺麗に円を描いて落ちていく。

「ほら、もう消えるよ」

「なにが？」

あれって踏んだらまずいのかな、等と、どんどんとたまる紫の液体に目を凝らしていると、後ろから伸びたカイの手が、くいっと顎をつかんで、顔を上げさせた。

「センジョ・レクスが」

それは異様な光景だった。

ぬらりと光るゲヘゲヘの体から、しゅうしゅうと音を立てて白い煙が上がっている。

白い煙に包まれたゲヘゲヘの体は、その表面から、まるでパズルを分解していくように、ばらけて、蒸発していた。

ゲヘゲヘは、言葉どおり消えていこうとしていた。

こんなとこでも格差社会

もうもうと立ち込めていた白い煙が消え去ると、ゲヘゲへの骸があった場所には、槍と、大小様々な金貨銀貨と、根元を紫の紐で縛られた葉っぱが二束落ちていた。

おびただしい量の紫の液体も、勿論消えている。

「カイ」

呆然と、今目の前で起こった出来事の行く末を見届けてから、私は重たい唇をゆっくり動かして、背後の人の名を呼んだ。

「なに」

頭上に落ちた呼気には、もう乱れがない。

「あれなに」

「金だな」

私が指差した先を見て、カイはきっぱりと告げる。

「あの葉っぱは？」

「多分、毒消し草」

「どうやって使うの？」

「さあ」

どうやら、まだカイも使った事がないらしい。まあアイギスが使えれば、毒を被る心配もないし、使用方法に頭を悩ませる必要もないのかも。

「あれどうするの？」
「一応拾っとく」

するりと虎徹からおりると、カイはしっかりとした足取りで、ゲヘゲへの遺骸跡へと向かう。
まず槍を拾い上げ、それから金貨と草を手にして戻ると、虎徹に括りつけられている袋の中へ、それらをぞんざいに投げ込んだ。
チャリンチャリンと音がするずた袋は、ずっしりと重みがありそうだ。

「幾ら入ってるの、それ」
「多分だけど１５，０３８，６４２ゼルギー。この状態になる寸前が１５，０３３，９４２ゼルギーで、１６回敵に遭遇して硬貨を拾った。今までの報酬からかんがみて、硬貨の種類と価値を適当に検討つけて計算しただけだから、確証はないよ」

ふうん、１５００万ですって、奥さん。

「牛丼一杯、何ゼルギー？」
「知らない。最初の街でショートソードは一本１５０ゼルギーだった」

その１５０ゼルギーの、初期装備の剣一本持ってないレベル１の私と、１５００万ゼルギーに超強そうな装備一式そろった、レベル９９のカイ。
何この格差。ウォール街のデモに参加しときゃよかった。

「ねえ、カイ」
「なに？」

「カイってかなり細かい性格？」

割り勘は一円単位まできっちり請求します。みたいな？

「……一桁まで金額を覚えていたことについて言ってるなら、たまたまメニューを開いた後だったから覚えてただけ」

ほら、もう行くよ。前へつめて。とカイが虎徹の鐙に足をかけ、ひらりと飛び乗る。

会ってから、それほど時間も経過していないというのに、カイが少しの間離れていただけで、背中がすーすーするように感じていた私は、背後に戻ったカイの気配に安堵した。

「カイ？」

「……なに」

「もう一つ聞いていい？」

「もったいぶらないで、さっさと聞けば」

くっとカイが虎徹の手綱を引けば、自分の足では体感出来ない速さで風景が流れていく。

「あの恥ずかしい技名は叫ばないといけないもんなの？」

「……」

びゅうびゅうと風を切りながら訪ねた問いは、黙殺された。

ゲヘゲヘに始まり、ニョロニョロに、ブヒブヒ、ジメジメに、ノソノソと、湿気の多い地帯を好みそうな、きもい系の敵に遭遇し、必死に虎徹にしがみついて、カイが槍をふるう事、十数回。見たくない見たくない。もうここの敵は見たくない！　とげっそりし始め

た頃、私たちはそこへ来た。

「カイ」
「多分境界線」

あ、なんだ。今度は「なに」じゃないんだ。
私たちは虎徹をとめて地面に走る一筋の白い光を見つめていた。
洞窟の岩壁と、この柱意味あんの？　と聞きたくなるような崩れた遺跡のような柱と、グロ敵しか目にしていなかった私たちが新しく目にしたもの。それが今、足元に走る白い線だ。

「これを超えたら洞窟から抜けれるのかな」
「中層に移動するだけだと思う。今までの敵は下層の奴らだったから」

カイの言葉に私はがっくりと肩を落とした。もう、もう、湿気過多とテラテラ光る系の敵は嫌だあああああ。

「中層はまだましだと思う」
「かわいい小動物系の敵が出てきたら、それはそれで嫌だ」
「まあね」

私は、首を傾けてカイを見た。
本当は、小動物ならまだいい。
人型の敵が出てきたら、カイはどうするのだろう。

「カイ」
「なに」

あ、元の会話復活。

「倒したくない敵が出てきたら全速力で逃げよう」
赤い目が数度、瞬いた。
「……そうだな」
洞窟内では逃げるのも難しいかもしれないけれど、そこは、まあ、ガンバレ虎徹。
ポンポンと首筋を叩くと、虎徹はグルウウウウと甘えたような泣き声をあげた。
「越えるよ」
「うん」

私はごくりと唾を飲み込んだ。
初めてのマップ移動（但し洞窟内）だ。
線の向こうは、今までの岩壁ではなく、茶色い土壁に変わっている。さらに、誰がともしてんの？　と小一時間問い詰めたいランタンの灯りが、ぽつぽつと等間隔に光っているのが見えた。
敵の姿は見えない、けれどカイは手綱を片手に持ち代えると、槍を握り締めた。
ひゅんひゅんと、感触を確かめるように空を切る刃。
やや控えめな声で「アイギス」と呟いてカイはシールドをはった。
……あれから技名を口にするときはずっとこんな調子です。ごめん。思う存分叫んでもいいんだよ。
すう、とカイが息を吸い込んだ。ぴりぴりとした空気が背中に刺さるようだ。
胸が痛いほどに早鐘を打っている。
――――――虎徹が太い足を踏み出した。

佐藤さん！？

ガキィィィィン、と今まで聞いた事もないような音が洞窟内に鳴り響いた。
ィィン、ィィィン、ィィィィンと、音の尾が壁を駆け巡って、どこまで反響していく。
耳をふさぎたくなるその響きのなか、パラパラと、見えざるシールド、アイギスが壊れていく音を聞いた。

今の今まで確かに何もいなかった、ただ洞窟が続いていただけの光景は、しかし線を越えた途端に一変した。
線を越えるとすぐに、真っ白な光につつまれ、先の音に見舞われたのだ。

「伏せ！」

私は犬か！！　と突っ込みたくなるような号令が下され、素直に虎徹の上にへばりつく。もう、この体勢もなれたもので、目線だけをあげて前方を目視する事が出来るようになった。
ぐいんと、虎徹が弧を描くように、次々と土を蹴って移動する。

「くっ」

カイの口から苦しげな息が漏れた。
アイギスを一撃で破壊し、カイが、伏せ「て」を付け足す余裕がないほどの強敵が現れた。
なんでええええええ。
下層より中層の敵のほうが強いってどういうこと！？
ぼひゅんぼひゅんと音を立てて飛来する火の玉を、カイが槍で切

り落とす。……切り落とす。なんで切れちゃうの！？　とか、突っ込んだら負けだと思ってる。
もうもうと舞う土ぼこり。喉は排ガスを思いっきり吸い込んだ時のようにいがらっぽく、目には涙が浮かぶ。
ゆらりと黄土色の膜の向こうに、影がゆらめいた。
――――――小さい！？
私は、その影を信じられない思いで見詰めていた。
二足歩行、きちゃったよ……。
背後を振り返ってカイの表情を確認する余裕はないが、強く躊躇しているのが全身から伝わってくる。

「逃げよう」

零れた声は泣き声に近かったと思う。
だって、アレは……子供だ。
ゆらり、ゆらり、と歩行しながら、薄くなる土煙の中から、姿を現しつつある影は、私の腰ほどまでの丈しかない。
どうみても子供にしか見えなかった。

「カイ、逃げよう……カイ！！」

タタンッタタンッと、虎徹を駆るカイ。
しかし、影の周囲を飛び回らせるだけで、退こうとはしない。

「カイ！！」

私は悲鳴をあげるように名を叫んだ。
とうとう、影が姿を現した。
丸い頬。錫杖を握る小さな手、サラサラと流れる肩までの髪、そして、頭部についた……猫耳。

なに、あれ、可愛い。
くりっと丸い目はつり気味で、ぽやんぽやんの頬には渦巻き模様。短い足には不釣合いなほどに大きな靴は歩くたびにカポカポと音をたてる。
人ではない。人ではないが、限りなく人型だ。いくら死体が消えるとはいえ、あれを斬るのは……

「……さ、ん」

手綱を握る腕に手を這わせようとしたとき、カイがかすれた声で何かを呟いた。ピタリと虎徹が跳躍を止める。
その間にも、目の前の、なにあれ可愛いな生物はぶつぶつと唇を動かし、手にした錫杖が淡く光を放ち始めた。
これでもかというほど長い尻尾は毛が逆立って、小刻みに揺れており、どう見ても怒っている。
やばいっす。まじでやばいっす！
アイギスはない、カイは放心のこの状態。
お母さん、先立つ不幸をお許しください。私のＰＣはトンカチで叩いて壊してから破棄してください。あと本棚の右端上にある辞書のカバーは外さないで下さい。
ぶるぶると震える頬に、目尻にたまっていた涙がするりと落ちた。
どんどんと強さを増す錫杖の光。眩しさに目を細めた時、背後でカイが叫んだ。

「佐藤さん！！　俺です！　カイです！！」

あら、お知り合い？
私は、はたと前方の、なにあれ可愛いな生物を見詰めた。
えええええ！？　あれ、お知り合いですか？　プレイヤーですか？　何で攻撃してくるの！？

はっ、そうか、あれが噂のＰＫ？
私は、ぽんと頭のなかで手を打った。
や～～～～め～～～～て～～～～。私を攻撃しても一文の得にもならないから、なにせ、まっぱだから、無一文だから！　後ろの人は色々もってるみたいだけど、何も知り合いを殺るこたあないでしょうに！

「佐藤さん！　佐藤さんですよね！？　俺ですよ、カイです！」
血を吐くようなカイの叫び声に、なにあれ以下略が、ぴくりと体を揺らした。

「カ……イ？」

しゅううううと途端に光を失う錫杖。
最後にぷすんっと音を立てて、光が消えると、なにあれ以下略はカランと地面に杖を転がした。

「カイ？　カイ？　カイなのか？　本当にカイなのか！」
ぽろぽろと大粒の涙をこぼしながら、なにあれ以下略はその場にがくんと膝をついた。
ぱっと虎徹を降りたカイが駆け寄って、小さな肩を両手でつかむ。

「そうです、カイです。佐藤さんもここに来ていたんですね。ひょっとしたらそうじゃないかと……」
「カイ……。そうか……僕だけじゃなかったんだな。……っ。くそっ」
力なくカイの言葉に答える佐藤さん？　は眉を寄せてぐっと唇を

噛み締めた。

「何てことだ。僕だけじゃないとしたら、まさか、まさか、他にも僕達のような人間がいるのか！？」

感動の再開を果たしたらしい二人の側に、よじよじと虎徹から降りて、近づく。

「あの～。オクトと申します。はじめまして、佐藤さん」

その他にもいる人間です。

ばっと顔をあげて私を見た佐藤さんは、次の瞬間、だっと地を蹴って、錫杖を構えた。

「え、あの……佐藤さん？」

ブィィィンと再び光を放ち始める錫杖。

まさかのＰＫ再び！？

「佐藤さん！！　彼もプレイヤーです。俺らと同じなんです！」

「……な……に？」

佐藤さんは眉をひそめて私を凝視する。

え、てか、私「彼」扱い？

「……しかし……なぜ」

裸なんだとおっしゃりたいんですね。

「今まさにゲームを始めようとしていたところで、倉庫に行く間も

なくここに飛ばされたんです」
「そ、うなのか？」
と、佐藤さんは、何故か私でなくカイに顔をむけて尋ねる。カイはこくんと頷いた。
「下層で倒れているところを見つけました」
「そう……か」
ようやく納得してくれたらしい佐藤さんは、ぶんと軽く杖をふって戦闘態勢を解除する。
「あの！　佐藤さん。始めまして、オクトと申します」
私は、未だどこか焦点の合わない佐藤さんに向かって深々とお辞儀をした。
「あ、ああ、佐藤だ。よろしく頼む」
くいっと中指で何もない眉間の前を押し上げる佐藤さん。
空をきる指に、はっと、顔を離して、己の手をまじまじと見詰める。
どうやら中の人は普段眼鏡をかけているらしい。
力なく首をふる姿に、何ともいえない悲哀を感じる。
性別の変わってしまった私もたいがいだが、こんな、なにこれ以下略な姿になってしまった、カイの　態度からして恐らくそこそこの年齢の男性だろう佐藤さんも哀れだ。
「こちらこそ、よろしくお願いします」

にっこりと微笑めば、悄然とした笑みが返される。
ずっと、一人でここにいたのだろう。
震えの止まらない指先が痛々しい。
早々にカイと出会えた自分の幸運を、私はこのとき思い知った。

「佐藤さん、虎徹は？」
「あ、ああ。この先の窪みに置いてきた」

まずはそこまで戻りましょう。と虎徹の手綱を引いて歩きはじめるカイ。
そのあとに続こうとした佐藤さんの手を、私ははっしと掴んだ。
びくっと肩を震わせて振り返る佐藤さんに、私は一縷の望みをかけて言葉をかけた。

「予備の装備、持ってませんか！？」

と。

せめてぱら見をしとけば良かった

「装備？……あ、ああ、そうだな。何かあると思うが」

怪訝そうに眉を潜めた佐藤さんは、私の格好をまじまじと見詰めて、納得したように頷いた。

佐藤さんの虎徹はゆるいカーブを曲がった先にある窪みに、ちょこんと座って待っていた。

見た目はカイの虎徹と全く同じで私にはさっぱり区別がつかない。

……おそらく佐藤さんにもカイにもつかないだろう。

「えーと、装備だったな。ああ、あった。あっ！」

ごそごそと虎徹2号に括りつけられた袋を探っていた佐藤さんは、あからさまにしまったという顔をして、私を見、また袋の中を見る。

「どうかしたんですか？」

袋の中から手を出そうとしたい佐藤さんに、私は首をかしげた。

「予備の装備。あるにはあるんだが……」

「シュージュ用。ですか？」

カイの指摘に佐藤さんは苦笑いをして、袋の中身を引っ張り出した。

「ちっさい」

現れた装備――――胸当てやら、腰巻やら、兜――――は、どれも佐

藤さんサイズの小さなもので、オクトである私には着れそうにないものばかりだった。

「すまないね。オクト君」

「いえ、ありがとうございました」

しゅんと猫耳をたらして、申し訳なさ下に謝られると、こっちが申し訳ないことをした気分になってしまう。

「あ、あのっ！　ところでシュージュって何ですか？」

ぷらんぷらんと寂しげに揺れるしっぽを見ていられなくて、発した言葉に、カイと佐藤さんは、信じられないものを見るような目で私を見た。

「あんた、説明書は……」

「面倒だったから読んでない」

きっぱりと断言すると、カイは何も言わずに顔に手を当てた。

「いくら説明書を読んでいないからといって、シュージュも知らないとは……内容も知らずに、ＲＯを買ったのかい？」

「もともとは弟のものだったんです。彼女ができやがりまして、やる時間がなくなったけど、３か月分料金を支払っちゃったからって私が」

「なるほど。そういう事か。それでこんな事態になるとは、不運だったね」

私以上に動転して挙動不審だった佐藤さんは、会話を重ねるうちに段々と落ち着きを取り戻していた。

柔らかな物言いといい、優しい笑みといい、大人の男を感じさせる様子に、私は頬を赤らめ……そうになったが、見た目がなにこれ以下略なので、そういう意味では全くときめかない。
見た目って大事。

「あんた、ヤクシャも何か分かってなかったんだな」

独り言のように呟きながら顔を覆ったまま、ため息をつくカイ。

「うん、てかヤクシャなんて」
「言ったんだ」

――――言葉知らない。と続ける前に、カイにすぱっと切られてしまった。

「はは。随分と息が合ってるな。二人はいつから一緒に？」

佐藤さんのこの一言をきっかけに、私達はそれぞれ、ここに来た時の状況を話し合うことになった。

その結果知りえた情報は、
カイと佐藤さんは直前まで一緒にプレイしていた事。
カイは私に出会う数時間前にはこの洞窟を彷徨っていたという事（ただ、体感時間なので正確な時間は分からないと言っていた）。
佐藤さんも、私たちと同じく落雷の音と光と共に、ここに飛ばされて、数時間、中層のごくごく狭い　範囲を行ったり来たりしていたという事。
その間に出会ったのは敵ばかりで、他のプレイヤーには出会わなかったという事。（いやいや、でも私達が中層にやって来た時、いきなり攻撃してきましたよね。ひょっとして他のプレイヤーも敵と

間違えて……なんて恐ろしい考えが頭をよぎったが、その可能性については気付かなかった事にした）

前門の虎に後門の虎。二匹の虎徹に挟まれて行われた報告会は、正直、あまり有益なものとはならなかった。

「とりあえず洞窟を出ようと思うんです」

カイの意見に、佐藤さんは頷きかけて、ふと動きをとめた。

「しかし、下層に同じように飛ばされたプレイヤーがいるかもしれない」

確かに、二度ある事は三度ある。というが、三度あることは当然、四度も五度もありそうだもんな。

佐藤さんのように一人でパニックになっているプレイヤーが居るとすれば、早く助けに向かわなければ精神が持たないだろう。

「それは大丈夫です」

カイの言葉に私と佐藤さんは同時に、彼の顔を見た。

「一番奥まで降りましたから。そこでオクトをみつけたんです」

うわお。カイがいなければ一人でパニックになって精神崩壊していたかもしれないプレイヤーは私だったのか。

「最奥まで一人で潜ったのか！？」

佐藤さんは、信じられないと首をふった。

「ええ、それで、アイギスを連発したもので。佐藤さん、リンデンの余分はありませんか？」
「アイギスを？　それは奮発したものだな」
奮発したのは私がいたからなのかな。ところで、
「リンデンって？」
「ＭＰの回復薬だ」
回復薬でちゃんと回復するんだ……と、ゲームであれば当たり前のことに私は感心した。
じゃあ、さっきの毒消しも兎みたいにもしゃもしゃ食べたら毒状態から回復するんだろうか？
「リンデンなら沢山あるよ」
袋の中から青色の液体が入った小瓶を取り出すと、佐藤さんは「カイは相変わらずアイテムを余分に持たないんだね」と笑って渡す。
絵の具を溶かしたような鮮やかな液体を躊躇なく飲み干すと、カイは眉を寄せて唇を手の甲で擦った。
うえ～、苦そう。
口を歪めて、ごしごしと唇を擦るカイを見ていると、それに気付いたカイにふいと顔を背けられる。
「それ、いい味じゃないよな」
くっくっと佐藤さんが笑うと、カイはますます顔を反らせて、しまいにはくるりと後ろを向いてしまった。
薬が苦手なことを恥ずかしく思っているらしい。

長身強面のヤクシャの姿で、そんな反応をされると萌えてしまうじゃないか。

「アイギスは僕が担当するよ。自動ＭＰ回復がついてるしね」
「はい、お願いします。前衛は俺が勤めますので」
「じゃあ、私は……」
「虎徹にへばりついてて」

なんか、段々と容赦がなくなってきてないか？
そもそも佐藤さんには敬語なのに、私にはため口ってどうなのよ。
けっと不満を顔にあらわにしていると、佐藤さんはくっくっと笑って自分の虎徹を指差した。

「じゃあ、オクト君は僕の虎徹に乗るかい。その方がカイも動きやすいだろう」
「はい！　よろしくお願いします！」

こうして私の騎獣は虎徹一号から、なにこれ以下略の佐藤さんが操る虎徹二号へと変わった。

スットコドッコイ・テキトー

やっぱりこうなりますよねー。

虎徹二号に跨った私は、小さな佐藤さんの後ろに座って、その細い腰に手を回していた。

肩に捕まろうとしたら、「それじゃあ、振り落としそうで僕が怖い」と佐藤さんに窘められて、この格好になった。

バイクのタンデムの要領だが、運転しているのが子供。後ろの彼女（偏見）役がガタイのいい男という、ちぐはぐな光景になっている。

見た目はともかく、アイギスを唱えて、後方から魔法を放つ、佐藤さんの虎徹に乗っているのはとても楽だった。

カイの虎徹に乗っていたときは、敵に遭遇するたびにロデオ状態だったから。

けれど、すっぽりと背中を覆うカイの体がなくなって、なんだか不安な気持ちになるのは、何故なんだろう。と考えて、刷り込みという言葉がぽっと頭に浮かぶ。

自分が生まれたての雛になった気分でどうにも癪だ。

「佐藤さん」

「ん？」

シタッシタッと、馬で言えば並足で虎徹を進ませる佐藤さんに、声をかける。

カイの無愛想な「なに？」と違う、柔らかい、鼻にかかるような返答に、ちょっと感動を覚えた。

「ヤクシャとシュージュの他にどんな種族が選択できるんですか？」

「うーん、まずオクト君のヒューマンだろ。それから、リョース…

…エルフって言ったらいいのかな。白い肌に尖った耳に美形ばかりの種族だね。あとは、ギガス……ごつい体で接近戦を得意とする種族で色々と耐性も高いし、あまりパーティを組みたくない人にはもってこいなんだけど、グラフィックのせいかこれを使っている人は少ないね」

どうせ操作するなら自分の好みにあう外見がいいもんな。

「以上の三つに、ヤクシャとシュージュを合わせた五種族から選択が可能なんだけど……オクト君、キャラ作成時に、他の種族見なかったんだね……。キャラの外見には結構力が入ってるんだけどな」

「長く続ける予定もなかったので、面倒でつい」

再びぺちょんと垂れた猫耳が私を誘惑……もとい、私に罪悪感を抱かせる。

「へえ、そうなの。俺はてっきり名前といえば『あああああ』な真性の横着タイプかと思ってた。オクトってのも今が10月だからだろ」

私達の話しなど聞いていないと思っていたのに、しっかり耳に入れていたらしいカイが、虎徹を横に並ばせた。

ぐっ、と言葉につまった私に、「図星」と冷たく言いおいて、再び先導に戻るカイ。

お前さんはそれを言いにわざわざ並んだんかい！

「違うから！　オクトパスのオクトなの！」

と悔し紛れに、何故か訳の分からない事を叫んでから、はっとして口を押さえる。

「じゃあ、タコって呼ぼうか？」
などという可愛げのない声が、振り向きもしないカイから聞こえた。
「オクトでいい」
くそっ、腹の立つ。佐藤さんの腰に回した手がぷるぷると震えた。
そんな私達を見て、佐藤さんはまた、くっくっと笑う。
佐藤さん、ご機嫌なのはいいんですけど、尻尾をぴんとたてるのはやめてー。鼻にあたってむずむずする。

三人に増えてからの道のりは、結構気楽なものだったと思う。
敵はカイと佐藤さんが、危なげなく倒してくれるし。ＭＰ自動回復と、所持数ＭＡＸまで所持していたらしいリンデンのおかげでアイギスやら何やらの魔法も使い放題だし。
なごやかに会話を（おもに佐藤さんと）しつつ、他のプレイヤーに会うこともないまま、私たちは二度目の境界線の前に来ていた。
これを超えれば、上層！　しかも敵もじめじめ系ではなくなるらしい。
逸る心を抑えて、私はしっかと佐藤さんの腰に回す腕に力を込めた。
念のためにと、カイと佐藤さんが、二重にアイギスをはる。
私達は上層へと足を踏み入れた。

厳重に警戒して突入した上層入り口は、中層へと入ったときのような緊迫した事態には全くならなかった。
本当になんのために立っているのか分からない土留めにもならないような、ひび割れた柱の本数が増えて、やっぱり誰が燃料を補充

しているのか不思議で仕方がないランタンが心持豪華になり、ぴちょんぴちょんと絶えず響いていた水音が聞こえなくなったぐらいで、他は何も変化がない。
節約の為にアイギスを解除して、どのくらい進んだだろうか。
前方からパタパタと飛来するそれを目にした私は、身をちぢこませて、佐藤さんの背中に無理やり隠れた。

「佐藤さん」
「ん？」
「あれは、なんですか？」
「ストリゴイ・テンソだね」
「……さっぱり分かりませんが、蝙蝠ですよね」

土壁の奥から姿を現したのは、４～５匹で固まって飛行する、蝙蝠の群れだった。
上を向いた鼻に、尖った耳に、黒い翼。ごくごく普通の見た目をした蝙蝠である。
但し、サイズが芝犬並み。
確かに、テラテラジメジメ系ではなくなったが、これも嫌だ。

「蝙蝠だねえ。吸血を使ってくるから、噛まれるとＨＰを持っていかれるよ」
「あんたは一口で致死量になるだろう」

さらっと涼しい顔で恐ろしい事を告げるカイ。
あんなのに噛まれて一口で死なない方がおかしいと思うんだけど。

「――佐藤さん」
「ああ、分かってるよ」

促すように名前を呼ばれて佐藤さんは、早速アイギスをはってくれた。
ばっさばっさと、徒党を組んで飛び回っていたスト……ストリ……スットコ……蝙蝠達は、私達の姿を認めた途端、嬉々として目を輝かせ、わき目もふらずに飛来する。

「紅炎」

ぼっとカイの槍に赤い炎が灯る。
数もあるしスピードもある。カイの槍で対処できるのだろうか。
私はますます小さくなって、佐藤さんに張り付いた。

「レンテ」

錫杖を掲げた佐藤さんの一言で、目にも留まらぬ速さで羽ばたいていた翼の動きが、しっかりと視認出来るようになり———なんで落ちないの？　なんて突っ込んだら（略）———目で追うのもやっとだった蝙
蝠達の動きが、三輪車で全力疾走する幼児程度に遅くなる。
後は簡単だった。
突く突く、斬る薙ぐ、そして突く。
蝙蝠達は炎に包まれ次々と地面に落ちていった。

罪（裸）と罰（ゲット品）

キーキーピーピーと耳をふさぎたくなるような、高音を発しながら息絶えると、白い煙と共に蝙蝠達の骸もまた消えていく。

「おおっ！？」

と、同時に現れたものに、私は思わず声をあげていた。
金貨でもほうれん草みたいな薬草でもない、一本の傘が、忽然と現れて、土の上に転がっていた。

「おっ、すごいなあ。レアアイテムじゃないか」

トテトテと虎徹を寄せた佐藤さんが、飛び降りるようにして着地する。

「種族、職業、レベル、これなら全部関係ないし、オクト君でも装備できるよ」

ぽんっと広げた傘は、真っ黒な洋傘で、

「蝙蝠なだけに蝙蝠傘……」

開発者の安易な発想に私はふうと息をついて瞑目した。

「どうぞ、オクト君」

失礼ながら、未だに昇り降りが大変なので、虎徹に跨ったまま、傘を受け取る。

傘をさし、虎もどきに乗った、趣味の悪いボクサーパンツ一丁の男。

「ぷっ」

「こら！　カイ！！　今笑ったな？　笑ったよね！？」

「い……や……気のせいでしょ」

「いーや、確かに笑った。てか、肩震えてるじゃん！」

顔を背けて、笑いをかみ殺すカイ。

羞恥に顔が真っ赤になった。

「まあまあ、初の装備、おめでとう」

見た目幼女（ひょっとしたら男の子なのかもしれないけど、　ちょっと外見だけではわからないから、幼女で）な佐藤さんに窘められると、こんな事で怒っている自分が、ものすごく大人気なく感じる。

そして、そんな佐藤さんの肩もちょっぴり震えていたりするもんだから、私は唇を尖らして、

「ありがとうございます」

とお礼を言って、静かに傘を閉じた。

「ところで、これ武器なんですか？　防具なんですか？」

タッタッタッと軽快に歩む虎徹の上で、私は佐藤さんの錫杖と共に括りつけられた傘を見ながら尋ねた。

これで敵をなぐったら、一撃で壊れそうだけど、センジョ・レク

スの毒攻撃なら防げそうかも。

「うーん、一応武器なんだけどね」

「攻撃力あるんですか？」

「最初に支給されるショートソードと同レベルかな」

レアのくせに、よわっ。

いや、むしろ蝙蝠傘と同レベルなショートソードが弱いのか？

「まあ、ここらの敵には全くきかないかもね。でも、運が飛躍的に上昇するんだよ」

宝箱を開ける前に装備しなおす的な武器か。

「魔道士系の女の子キャラだと、好んで装備する人もいるしね」

あー、なるほど。

私は、愚弟、修也のキャラを思い出した。シュウコちゃんにこの傘を持たせたらぴったりかもしれない。

「間違っても、全裸のマッチョマンが持つ武器じゃないですよねー」

「そんな事ないよ」

肩を落とす私に、佐藤さんは慌ててフォローを入れる。

「パンツははいてるじゃない」

フォローになってなかった。

それにしても、と私はしみじみ自分の姿を見下ろす。

「私が装備できる防具も落としてくれませんかね。この格好で佐藤さんに抱きついてると、犯罪者になった気分になるんですが」

しんと辺りが静まり返る。

あれ？　なにかおかしなことを言ったかなと首を傾げた次の瞬間。

ぶはっ

と盛大に佐藤さんが噴出した。

顔を上げれば、くるっと振り返って睨み付けるように目を細め、見てはいけないものを見てしまったというように、さっと顔をそむけるカイ。

佐藤さんの中の人……あれ？　なんかおかしい。

幼女の中の人である佐藤さんは、笑い上戸だったようだ。

ひいひいと苦しげに息を継ぎ、ぽろぽろと涙をこぼして、「腹が、痛い……駄目、腹痛い」と、ひたすら呟いて爆笑していた。

新たに敵が現れて、

「アイ……プッ、アイギ……ブブ、アイギス！」

なんて噴出しながらようやく唱えられたぐらいだから、佐藤さんの上戸は相当なものだ。

呆れた様に、一人で黙々と槍を振るうカイは、大人びて見えた。

中の人は一番年下のはずなのにね。

マイクを持つ手は小指をたてて

蝙蝠、鼠、蝙蝠、鼠、たまにゴ……Gのつくあれ。
上層に来ようが、ここの敵はちっとも目に優しくない。
そのほうが、精神的には優しいのかもしれないけど。

「もう半分は進んだかな？」
「どうでしょうね。確か上層が一番長かったはずですけど」

なんて、カイと佐藤さんの会話を聞きながら、虎徹に揺られる。
気付けばいつの間にか洞窟の幅は随分と広くなっていた。
虎徹二頭が横に並んで歩いてもまだおつりがくる。
下層のように岩盤をくり貫いたような形状でもなく、中層のように狭くもなく、ましてやコンクリートが吹き付けてあるわけでもない。正直、敵よりも頭上の土が崩れないか気が気でなかった。
広くなった洞窟内にはもう一つ変化があった。
緑の蔦が、壁を這うようになったのだ。あのー、光合成は……なんて無粋な事を言うつもりはない。
変化に乏しい洞窟内で目にする緑は、何よりの癒しになった。
緑の蔦が生え始めて、十数分。どんどんと葉の量が増え、さらに真っ赤な薔薇のような花がつきはじめた。あのー、受粉は……なんて言い出すのは野暮だと思ってる。
目を楽しませてくれる赤い花に、気分も上がる私とは反対に、何故かカイと佐藤さんは、段々と険しい顔つきになっていった。

「カイ」
「ええ」

とうとう、顔を見合わせて示し合わせるように、こくりと頷きあ

う、カイと佐藤さん。

「どうしたんですか？」

心配になって尋ねると、佐藤さんは困ったように微笑んだ。

「どうやら、僕達は本当についてるみたいだよ」

「モニタの前に座ってゲームをプレイしていたなら、両手を挙げてよろこんだでしょうね」

さっぱり話が見えず、二人の顔を見比べていると、佐藤さんはやっぱり困ったような笑顔を浮かべたまま、口を開いた。

「カウント・ノスフェラトゥ。テンソ系の敵が現れる場所に、ごく稀に姿を見せる、テンソ達のいわばドンだね。落とすアイテムは様々だけど、レアものを落とす比率が高く、経験地も大きい。ノスフェラトゥを狩ろうと洞窟内をひたすら往復するチームもいるけれど、予期せず遭遇して、全滅させられるパーティもよく目にする」

「レアモンスターでレアアイテムを落としてくれて、経験値もがっぽり稼げて、うっはうは。だけど超強いってことですか」

「稼ぎたい時にはおいしいんだけどなあ」

「今は激まずですね」

目を伏せて、短い腕を組み、うんうんと頷く佐藤さんは、やばいくらい可愛かった。

「で、ノスフェラトゥ出現と、この薔薇みたいな花は何か関係が？」

「あ、そうそう。彼のシンボルみたいなものでね、彼が現れるのに先立って、血のように赤い花が咲き乱れる光景に遭遇するんだ」

「てことは、すでにノスフェラトゥに出会っちゃうのは決定事項っ

て事ですか！？」
「そういうことだ。来た」

ええっ、もう！？
さっと槍を構えるカイに続き、佐藤さんは錫杖とともに、傘を引き抜き、私に手渡してくれる。……ものすごく役に立つ気がしないけど。

「アイギス」

きんと、透明な膜が張られた。
風が吹く。
生暖かい風が、どこか血なまぐさく感じるのは、風に舞った花びらが、鮮血のように赤いからだろうか。
敵の姿はまだ視認できない。
ざらざらとした茶色い土壁、揺らめくランタンの火。
しんと静まり返った洞窟内に、赤い花びらが降り積もっていく。
何かおかしい。
延々と続くかに見える穴が続くその方向に目を凝らす。ふいに、空間が陽炎のように揺らめいた。

「紅炎」

太ももに止められたベルトから引き抜いたナイフを手に、カイがそう呟くと、ぼっと刃が燃え上がる。
熱そう。と思った時には、ナイフはカイの手を離れ、揺らめきの中へと吸い込まれていった。

――――――ドンッ

そんな音がしたかと思った。
ランタンのほの暗い明かりに包まれていた洞窟が一瞬にして闇に落ちる。
肺に空気を送り込む。呼吸という当たり前の行為さえ、意識してやらなければ滞ってしまいそうな、圧倒的な恐怖がそこに在った。

「ルーチェ」

静かな佐藤さんの声と共に、ぽっとカイと佐藤さんの虎徹に吊るされたランタンに火がついた。
暑くもないのに、汗が幾筋もしたたりおちていく。
カイも佐藤さんも、瞬きさえせずに、ただ前方の一点に目を据えていた。
闇がそこに居た。
漆黒のマントに包まれた体。
長い黒髪。
白い顔はこの世のものとは思えぬ、作り物めいた（……いや、実際に作り物のはずなんだけど）美貌を湛え、今まさに血をすすってきたといわんばかりに赤い唇は、ゆるりと弧を描いている。
自ら首筋を差し出してしまいそうな、神秘的な絶世の美貌の男だった。
なのに、なのに、なに、その化粧！
すっとひかれた黒いアイラインに、青紫のアイシャドウ、細く細く眉えられた眉。
ノスフェラトゥの第一印象は恐怖。第二印象は、「一昔前のビジュアル系バンドでマイクを握ってそうな人」だった。
チープなアイシャドウのせいで、濡れたような赤い唇はグロスを塗りすぎたようにしかみえない。
残念すぎる。

バサリッ

ノスフェラトゥが片腕を上げてマントを広げた。
途端に湧き出す、テンソの群れ。
キイキイと甲高い泣き声を上げながら、羽ばたく彼らの狙いは、カイのようだ。

「レンテ」

佐藤さんの唱えた魔法で一気に遅くなったテンソの群れを、カイは燃える槍で貫いた。
しかし、最後の一匹を仕留めた頃には、ノスフェラトゥによって新たにテンソが生み出されていた。
レンテが効かないらしいノスフェラトゥは、バッサバッサとマントを広げ、わっさわっさとテンソを生み出している。
鬱陶しいな、おい。

「カイ、まずはマントだ」
「了解」

くるんと槍をまわして脇に挟むと、カイと佐藤さんは同時に魔法を唱える態勢に入った。

「シール」
「フランナール！」
「フランナール！」

佐藤さん、カイ、佐藤さんの順に次々に呪文が唱えられた。
説明書も読んでなきゃ、魔法の一つも分からないけれど、恐らく最初の「シール」でステータス異常を狙ったのだろう。傍目にはま

ったく何も変わらないから想像でしかないけど。続く「フランナール」では、二人の眼前に現れた炎の塊が、徐々に火力を増しながら、山なりになって飛んでいき、ノスフェラゥのマントに命中していた。黒煙を上げて燃えるマント。

「フランナール！」
「フランナール！」

立て続けに唱えられる炎の魔法。
けれどノスフェラトゥも燃えるマントでまだまだテンソを生み出している。
ビロードのような光沢のあるマントを翻すたびに、炎を掻い潜ってテンソが生まれ、鋭い牙の生えた口を開けて、獲物（つまり私たち）へと襲い掛かろうとしていた。

「レンテ」

びくりと体を堅くして蝙蝠傘をかまえる私の前で、佐藤さんは慌てず騒がずテンソを押さえにかかった。

「フランナール」
「フランナール」

と思ったら、テンソはレンテをかけただけで放置し、また二人の魔法はノスフェラトゥのマントへと集中する。
ばっさばっさ。マントがはためき。キーキー。テンソが生まれる。

「レンテ」

すると佐藤さんがテンソを抑え

「フランナール」
「フランナール」

二人でまたマントへの集中砲火。

ばっさばっさ。キーキー

「レンテ」
「フランナール」
「フランナール」

ばっさばっさ。キーキー

「レンテ」
「フランナール」
「フランナール」

極めると単なる作業になっちゃうといういい見本かもしれない。
フランナールでマントを燃やし、蝙蝠が生み出されれば、すぐさま佐藤さんがレンテ（スピードダウン）を唱え再びフランナールの二重奏。
カイが一回魔法を発動させる間に、佐藤さんは二回魔法を使っていた。詠唱速度アップのスキルなり装備なりがあるのかもしれない。

「獄灼炎」

レンテでは抑えられなくなったテンソが間近に迫ると、ようやくカイは槍を構えた。
フランナールの巻き添えをくって、翼の端を焦がしながら、レン

テの影響でゆっくりと飛翔するテンソを屠るのはカイには簡単な仕事だった。
白刃が一閃した後に転がるのは青い炎に身を包まれたテンソの群れ。
やがてノスフェラトゥのマントから、新たに生み出されるテンソはいなくなった。

俺の話を聞け！

随分と短くなった、ぷすぷすと燻るマントを肩から外し、ノスフェラトゥがにいと唇を吊り上げる。

「よくも我が眷属をいたぶってくれたな」
「うおぉぉ！？　しゃべった！」
「うん、ボスレベルの敵はしゃべるんだ」

そっかあ。喋るのか。なんかちょっと嫌だな。人型だし、人語を解されると抵抗がある。

カツン、カツン、といつのまにか手にしていたステッキを打ちつけ、優美な足取りで近づくノスフェラトゥ。

「下郎の分際で我を相手にしよ」
「フランナール」
「……うなど。思い上がりも」
「フランナール」
「シール」
「……甚だしい。思い知るがいい！　真の」
「フランナール」
「あ、あのう。佐藤さん？」

私はそっと佐藤さんの袖をひいた。

「ん？」

相変わらず鼻にかかった声は柔らかい。

「口上の間は待ってあげなくていいんですか？」

私は、哀れにも降り注ぐ火の粉に黒髪の端を焦がす、ノスフェラトゥを指差して囁いた。「恐怖を知れ！　さあ、人間ども、我にたてついたこと、とくと後悔させてやろぞ！」なんて言葉の合間にも、容赦なく飛び行く火の玉。

「本当は攻撃できないはずなんだけどね。出来たね」

にっこりと微笑みながら、フランナールを発動する佐藤さんは、ほんの数時間前の動転して振るえて涙を流していた佐藤さんとは別人のようでした。

「紅炎」

ナイフ3本を片手にとると、カイは炎を灯して虎徹から降りる。ようやく口上を述べ終えたノスフェラトゥめがけて、それを投げつけると、すぐさま槍を構えた。

「獄灼炎」

カイの槍を魔法で強化したのは佐藤さんだった。

「はっ！！」

気合の掛け声も勇ましく、一気に地を蹴って距離をつめると、ノスフェラトゥの肩をめがけて、槍を振り下ろす。

ザシュッ

布を切りさく音と共に飛び散る鮮血。

ノスフェラトゥは攻撃を避けもせずに己が身を切らせる。

なんなのこいつ、マゾなの。

「ふ、ふはははは。我が血を見るなど」

「フランナール」

ザクッザクッ

「幾百年ぶりのことであろうか」

「フランナール」

ザクッザクッ

どうやら「攻撃を受ける」をトリガーとする台詞があったらしい。容赦なく放たれる魔法に焼かれ、カイの槍にサクサク刺されながら、ノスフェラトゥはまだ頑張っていた。

「この代償は、高くつく。死すら生ぬるい絶望を味わわせてやろう！」

全ての台詞を述べ終える頃には、ノスフェラトゥは満身創痍になっていた。

焼けて縮れた髪。煤だらけの顔。びりびりどろどろの服。もう、ビジュアル系バンドは解散だ。

止めとばかりに、カイの槍がその胸を貫いたときだった。

唇の端から紫色の血を滴らせながら、ノスフェラトゥは不敵に笑う。

「レスタウロ」

形の良い唇が静かに動いて言葉をつむぐ。

「くそっ」

佐藤さんが、悔しげに悪態をつくその前で、そろそろ見ているのも可愛そうになほどにボロボロの容姿が、見る間に修復されていく。

「佐藤さん、今の呪文って……」

「全回復……だよ」

テンソを生み出す以外の、己の初のターンが回復呪文というのも切ない。

にしても、全回復とは。

私にはＲＰＧをプレイするにあたって、許せない敵が二種類いる。

ひたすら仲間を呼んで増殖する敵と、自己回復しちゃう敵だ。

両方の要素を併せ持つなんて、

「くそ鬱陶しいですね」

「そう、これだからこいつ嫌いなんだよ。魔道騎士と、魔道士じゃ、ちょっと決定打に欠けるかな」

ムキムキマッチョな戦士系が足りないのか。見かけだけはマッチョなのに、お役に立てなくてごめんなさい。

「佐藤さん、あいつのＨＰが残り少なくなったら、また獄灼炎かけてもらえますか」

素早く後退したカイが佐藤さんに耳打ちする。

「いいけど、どうする気だ？」

「ボランヴールを使います」

カイの答えに佐藤さんは息をのんだ。

「駄目だ」

強い声できっぱりと突っぱねる佐藤さん。だがカイは譲らなかった。

「ボランヴールを使えば俺のＨＰは１０％まで減ります。ＨＰが残り５００を切れば、窮鼠が発動して攻撃力がＵＰしますから、それを狙います」

相談でもなければ、提案でもない。カイの中では既に決定した事項なのだと、その強い眼差しが語っている。

佐藤さんはため息をついた。

「君は本当に頑固だな」

カイを見詰める佐藤さんの目は心配でたまらないというように潤み始めていた。

「２打だ。２打打ち込んだらすぐに下がって、回復すること。いいね？」

「……はい」

ほんの少し迷ったように目を伏せてから、カイはすっと顔をあげると、佐藤さんの目を見て頷いた。

二人の話と涙ちょちょぎれる友情についていけていない、私……

……とノスフェラトゥ。

ちなみに、二人の間で熱いドラマが繰り広げられているこの間、

私は虎徹の上で、ぶんぶんと蝙蝠傘を振り回して、どうにか役に立てないものかと思案しており、ノスフェラトゥはレスタウロ詠唱をトリガーとした長台詞を一人でぺらぺらとまくし立てていた。

可哀想すぎるぞ。ノスフェラトゥ。

ヒロインは佐藤さん？

俺は何度でも復活しちゃうんだぜ。参ったか虫けらども！
要約するとそんな感じの台詞を喋り終えると、ノスフェラトゥはステッキで宙に円を描いた。
その円状にいくつもの小さな炎がボボボボボッと灯る。

「嘆きなさい！」

いまいちよく分からないきめ台詞と共に、炎は蛇のように一列になって飛翔した。
狙いは、佐藤さん！？
危ないっ！と叫ぶ前に炎の蛇はアイギスにぶちあたり……霧散した。
すごいのは名前だけじゃなかったんだ。アイギス様様！
ほっと胸をなでおろしたのも束の間、ぱりぱりっと卵の殻がひび割れるような嫌な音がきこえた。

ぱきんっ。

一際高い音をたてると、アイギスもまたきらきらと光の余韻を残して消え去る。

「シール」

ええええええ。アイギス消えちゃったのに、先にそっち！？

「アイギス」
「アイギス」

ひいいと、蝙蝠傘を握り締めて顔を青くしていると、カイと佐藤さんが二重にアイギスを張ってくれる。
それからはまた、フランナールの大合唱だった。
ノスフェラトゥが攻撃をしかけるたびに、「あっ」「ひゃあ」「あぶなっ」「ぎゃ」と虎徹の上で悲鳴を上げ続けることしばし。

「佐藤さん、いきます！」
「ああ」

振り下ろされるステッキの合間を掻い潜ってカイが懐にもぐりこむ。

「ボランヴール！」

それは詠唱というよりは絶叫に近かった。
まず爪の先が真っ黒に染まった。かと思うと、そこから蔦のようなものが這い出て、見る間にカイの手を侵食していく。

「ぐっう、うあああ」

苦しげな声が噛み締められたカイの唇から漏れた。
蔦はあっというまに顔にも現れた。鎧に覆われて見えないが、恐らく体中に蔦が張り付いているのだろう。

「ぐっ」

はっ、はっ、はっ
くぐもったうめき声。
カイの息遣いは荒く乱れ、とうとう眼球にまで黒い蔦がはったと

き、オォォォォンと鐘をついた後の余韻に似た響きがカイの体から発せられる。
頭の芯を震わせる振動に、両手で耳をふさいだ。その反動でぶれた視線を、再びカイに戻したときには、黒い蔦はきれいさっぱりカイの体から消え去っていた。
もはや声も出ないと言った様子のカイ。固まったように腕を突き出し、短い呼吸を繰り返している。
その、震える指先から、しゅるしゅると黒い糸が渦巻き、湧き出て、次々とノスフェラトゥの体を蝕んでいく。
ボランヴールとは使用者のＨＰを犠牲に相手にダメージを与えるもの。のようだ。二人の会話から何となく想像はついていたが、こんなに痛そうだなんて思わなかった。

「獄灼炎」

固い声音で佐藤さんが呟く。
地面と水平に、親指と人差し指の間に挟むようにして持っていた槍に、ぼっと青い炎がともった。
２撃
佐藤さんとの約束だ。
だが、カイはノスフェラトゥへと攻撃を繰り出す前に、太もものベルトからナイフを抜き出すと、それを鎧の継ぎ目を狙って、己の足へと突きたてた。

「うっあああ」

聞いていられない。カイの悲痛な叫びに胸がぎゅうっと締め付けられた。
ボランヴールだけではカイの狙う効果は得られなかったらしい。
さらにＨＰを削るために自分で自分を傷つけたのだ。

私には理解できない胆力だ。
捨て身のカイの行動。
けれど、この間が命取りだった。
カイが痛みに耐えて、槍を構えようとした時、ノスフェラトゥの唇がにいとつり上がる、

「レス」
「させるかあああああああ！！」

ノスフェラトゥが全回復魔法を唱えようとしている。カイの攻撃は間に合わない！
そう分かった瞬間、私は手にしていたものを渾身の力でもって投げつけた。
ビュオオオンと風を切って、恐るべき速さで飛んでいく――――――蝙蝠傘。
仁木　杏の体なら、届くかどうかも怪しかっただろうそれは、オクトのムキムキ筋肉の力を得て、一直線にノスフェラトゥの元へ飛んでいき、ビイイインと音をたてて、彼の額に命中した。
すげーよ、マッチョマン！
槍投げに出場したら間違いなくワールドレコードを更新できると思う。
ほんのちょっぴりめり込んだらしい蝙蝠傘は、しかしというか、やはりというか、殺傷力は無いに等しいものだったらしい。
ノスフェラトゥは忌々しげに傘を叩き落とすと、ギョロリと赤く光る瞳を傘の出所……私に向ける。
わーあ、ロックオンされた。
と思ったら、私なんて存在しないかのように、その目は私の上を滑り、佐藤さんを見据える。
「お前など相手にするのも馬鹿馬鹿しいわ」そう言われた気がした。へこむわー。

佐藤さんを睨んで、杖を掲げるノスフェラトゥ。
だが、もう遅い。
「お前の相手は俺だ！」
体勢を立て直し、しっかりと握り締めたカイの槍がノスフェラトゥを貫いた。
「ガハッ」
血を吐いて、信じられないというように首をふるノスフェラトゥ。
カイは血まみれになった槍を、力任せに引き抜き、倒れこむようにして、ノスフェラトゥへと突き刺した。
ごぼりと塊となって零れ出る紫の血。どくんどくんと心臓が脈打つたびに、おびただしい量の血が流れていく。
やった……のだろうか？
「レスタウロ！」
結果が出る前に、佐藤さんが回復魔法を唱えた。
ノスフェラトゥの上に倒れたカイの体が癒されていく。
待ちきれなかったのだろう。
あんなに接近して、ノスフェラトゥの鋭い爪で裂かれれば、極限までＨＰを削ったカイなど一撃で昇天だ。
私は滑り落ちるようにして虎徹から降りると、カイに駆け寄ってその体を引き起こした。
重い鎧を着込んだ大きなカイの体を、オクトの体は簡単に持ち上げる。
脇の下に腕を入れ、胸の前でがっちりと両の手を組むと、カイの足をずるずると引きずって、その場を離れた。

カイを抱き起こす際に見えたノスフェラトゥの目には、僅かに光が残っていた。今にも消えようとしていた微かな光が……。

「フランナール」

駄目押しの一撃が佐藤さんから放たれる。
ごうごうと燃える炎につつまれて、白い煙と化していくノスフェラトゥ。
彼の体と流れ出た血が、すべて煙に変わって消える頃になって、私はがくんとその場に膝をついた。

「重い」
「あっ、ごめん」

引きずってきたカイの背中に体重をかけてしまった事に気付いて、すぐさま体を起こした。

「カイ……」
「なに。なんて声だしてるの。もう回復したよ――――――さっきは助かった」

鎧についた土を払いながら立ち上がろうとしたカイの肩に、手をのせて、ぐっと抑えこむ。
まさか、そんな事をされるとは思っていなかったのだろう。バランスを崩したカイが尻餅をついた。

「何するんだよっ！」
「座ってて」
「何で？」
「とにかく座ってて！」

不服そうな顔をしながらも、カイは素直に片足の膝を立てて座り込む。
確かに体はレスタウロで回復したかもしれない。
けれど強烈な痛みを味わったばかりの心はどうだというのだ。
作り物のヤクシャの体に与えられた痛みは、生身のカイの心を蝕んだはずだ。
私はカイの背中にそっと額をついた。
悔しい。何の役にも立てないことが。歯がゆくて、情けなくて、たまらなかった。
何故、オクトを作ってしまったのか。シュウコちゃんできていたら、きっとカイはこんな戦い方をせずにすんだだろうに。

「ごめん」

小さく零された言葉。

「なんで、カイがあやまんの」

ごつんと、額を背に打ち付けた。

「いって」

役に立てないばかりか気まで使われて、こんなに惨めな事は無い。
ヒリヒリと痛むおでこをぐりぐりとカイの鎧に擦り付ける。

「あんたなあ……」

呆れたようなカイの声。
ふと、カポカポと足音を立てて近づく小さな人影に、私は顔を上

げる。同時にカイも前を向いて

「え」

「あ」

二人で固まった。

「カイ。ボランヴールは二度と使わないでくれ。頼む」

幼児並みの小さな体を震わし、ぷにぷにの頬を大粒の涙でぬらしながら、震える声で懇願する佐藤さんがいた。

「カイ。カイ。君に何かあったら、僕は……僕は……」

えぐえぐとしゃくりあげて、ぎゅっと目を瞑る佐藤さん。

閉じられた瞼からも、止まる事を知らぬ涙が、行く筋も流れて、ぽたぽたと服に染み込んでいく。

なに、この……可愛い生物は。

いや、もう、反則でしょう。その容姿は！！

変態紳士誕生

「すっ、すみません。佐藤さん！　あの、もう使わない……ようにしますから。ほら、見ての通り、もう体もなんともないですし、痛みもないですから、だから……泣き止んでもらえませんか？」
「そっそうそう、もうノスフェラトゥは倒したし、洞窟でるだけだし、使わないですよ。ほ、ほらほら、もう泣かないでー。よしよし、いい子だね」

わたわたと駆け寄り、身振り手振りで説明するカイと、サラサラの髪に覆われた頭を撫でる私。
ぽろぽろと涙を零しながら、佐藤さんは、むっと眉を寄せた。

「なぜ、子供扱いなんだ。僕は本気でっ！」

怒りかけた佐藤さんは、またさっきの光景を思い出してしまったのか、うっうっとしゃくりあげ始めた。
髪が濡れた頬にはりついて、ベトベトのぐしゃぐしゃになった顔を、ごしごしと掌でぬぐう姿は、まさに胸キュンもの。
ぎゅうぎゅうに抱きしめて、ほお擦りして、撫で回したいけど、中身は佐藤さんだ。
ごくりと唾を飲み込んで耐える私の横で、カイは困ったように頬をかいていた。

「あっ」

ふいに、頬をかく手を止めてカイが声をあげる。

「んっ？」

泣いているせいで、何割り増しかで鼻にかかった声で反応する佐藤さん。
もう中身が佐藤さんでもいい気がしてきた。
「俺達、本当についてるかもしれませんよ」
カイの視線の先は、丁度ノスエフェラトゥが消えた辺りで……
「何か、落ちてる」
血の染みも何もかも消えたそこには、お馴染みの金貨と、黒い物体が二つ落ちていた。
「これは、すごいな……」
佐藤さんが呆然とした声をだして歩み寄る。
「レアものですか？」
私が装備できる防具だと嬉しいけど、傘を投げただけなのにそんな主張はちょっとしにくい。
佐藤さんに遅れて続けば、一足先に物体Xまでたどり着いた佐藤さんが、それを手にとって、満面の笑みで振り返った。
「オクト君！　君でも装備できるレア防具が2点も手に入ったよ！」
実のところ、役に立っていなくとも、装備が手に入ったら、佐藤さんはそう言ってくれると思っていた。
だから「本当ですか！？　嬉しい、ありがとうございます！」っ

て言おうと待ち構えてた。
けれど、佐藤さんが手にしたそれを見て、私は
「え」
と声を出して、立ち止まってしまった。
「すごいですね。レアが一度に2点も」
感心したように、それに見入るカイ。
「ほら、オクト君。つけてつけて」
「え、いや……でも」
涙の跡もそのままに、佐藤さんは笑顔でそれを差し出した。
「なに、つけないの？」
そう聞くカイの声はいつもどおりの平坦なものだったけど、口元が意地悪く歪んでいる。
「ほらほら、遠慮しないで」
対して佐藤さんは一分の曇りもない笑みだ。この人、天然なのか。
「や、でも……えーと」
「俺がボランヴールまでやって得た報酬……なんだけどな」
それを言われてしまってはつけないわけにはいかない。

「うっさいな。つければいいんでしょ！」

私は腹をくくると、きょとんとした顔で首を傾げている佐藤さんの手から、それを受け取った。

「恥ずかしいから、向こうをむいててもらえますか？」

頬が熱い。きっと真っ赤になっているだろう。

頬に手を当てて、小さな声で懇願すると、何故か二人は、「うっ」とうめき声をもらし、青い顔をして、くるりと体反転させる。

つるつるとした手触りのそれらを身につけると、私は消え入りそうな声で告げた。

「もう、いいですよ」

振り向いた二人は、

「あ」

「ぷっ、あっはははは。最高！」

それぞれ違った反応を見せた。

佐藤さんは、ぽかんと口を開けたあと、さっと目をそらし、カイは腹を抱えて大爆笑。

私はぎゅっと手を握り締めて羞恥に耐えた。

これは、カイが命がけで手にしてくれた大事な報酬なのだ。

「いいじゃん、似合ってるよ」

ひぃひぃと体を折り曲げて笑うカイ。

多少の辱めは耐えな……ければ……。

「あー、もう。頑張って倒したかいがあったよ。ねえ、佐藤さん」
ぐっと唇を噛み締めて眉根を寄せた佐藤さんの肩は、もちろん小刻みに揺れている。
「うるさいわ！　やっぱりカイがつけなさいよ！」
「それ、ヒューマン用だから、俺は無理」
確かに、角が生えているカイにこれは装備できない。
ぐっ、と言葉につまった私は、身ににつけた、それら――――――シルクハットをぎゅっと掴んで、無理やり目深に被り、首元を飾るシルク地の蝶ネクタイを手の中に握り込んで隠した。
「佐藤さん、笑いたければ笑っていただいてかまいませんが」
ぷるぷると肩を震わせて、息を止めている佐藤さんの顔は、赤を通り越して紫に変化していた。
「やっ、そんな……笑う、だな……んてっ……ごめん、オクト……ぷっ……君。も、無理っ！！」
このあと佐藤さんの笑いの嵐が収まるまで、その場で長い長い休息を取ることになったのはいうまでもない。
ただ今の装備、趣味の悪いボクサーパンツ、蝙蝠傘、シルクハット、蝶ネクタイ。
もうやだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2031y/

○月×日、今日は快晴

2011年11月8日02時02分発行